

伝統芸能を通じた人格形成と国際交流

『天のソリ 地のソリ』

ソウル事務所所長補佐 岩佐 晃 (宮崎市派遣)

二〇〇八年四月。私は、日韓交流年オーブニングセレモニーに招待されました。両国の関係は、二〇〇六年に韓国からの訪日旅行者が二一〇万人を超え、その後も着実にその数字を伸ばし、『未来志向』を掲げる新たな政権の下、より一層の交流促進をしようかと、華々しいスタートを切ったかに思えました。

しかし、数カ月後に両国の懸案である『竹島』問題が発生。韓国でいうところの都道府県教育委員会では、青少年交流行事等の中止要請を通達した自治体もありました。

それから、さらに数カ月が過ぎ、次は世界的な経済不況の到来。為替相場の大幅な変動により、本日(本文執筆は二〇〇八年一月二七日)の日本の地方紙によると、向こう二週間程度で一つのホテルで一〇〇人程度の宿泊予約キャンセルが発生しているとの報道がありました。

そのような折でも、影響が出にくいのがいわゆる『草の根交流』。住民レベルでの交流です。

今回は、私が出会った韓国伝統音楽を通じた草の根交流の主役を紹介したいと思います。

『天のソリ 地のソリ』

二〇〇八年七月、同僚と韓国の伝統音楽を視聴しました。

それは、隣接のレストランで食事をし、その後二〇〇人程度が収容できる小さな劇場で演奏を行うというもので、費用は合わせて一万ウォン(当時のレートで一〇〇〇円程度)でした。格安の料金で、食事と演奏が聴けるということで、初めて韓国伝統芸能を見聴きする私は、一体どんなものだろうと想像もできずにいました。

演奏が始まり、いくつかのユニットの演奏を聴いた私は、演奏者がみんな若く、高校生や大学生くらいであることに気が付きました。周りを見渡すと、確かに、客も、演奏者の友人や家族と思われるような人が多いように感じましたが、日本人観光客と思われる方々もいました。合間には、MCによるクイズもあり、正解するとCD等の商品も配られるなど、アットホームな雰囲気を感じられる、気軽な公演だったというのが私の感想でした。

演奏終了後には、劇場内の一室にて、演奏者と聴衆、主催者事務局のみんなが入り交じるスタンディング方式のワインパーティーも開かれ、多くの人達の会話でにぎわっていました。

この公演を提供しているのが、『天のソリ 地のソリ』という、主役は生徒や学生、事務局運営は伝統音楽の伝承に携わる関係者が行っている民間団体だったのです。

設立のきっかけ

『ソリ』は日本では『音』と訳されますが、古くから存在する土俗民謡は、庶民の間に発生した素朴な音楽で、一定地域に伝承されてきたものです。日本もそうあるように、仕事をしながら口ずさむ曲や、女性のための謡であり、風土や生活習慣、また思想などが垣間みられるこれら民謡は、地方ごとに区分され、大きな特色があるようです。

この公演で演奏していたのは、実は、この音楽を専門的に学んでいる国立国楽院の中・高校や同大学生、そして講師達だったのです。日ごろの練習の成果を公演という形で発表し、韓国の国民はもとより多くの人に伝統芸能に触れてもらいたいとの趣旨のもと、毎月第一月曜日に開催している公演に主催者側から案内をいただき、私達は視聴したのでした。

同団体は、二〇〇一年に韓国土俗民謡の専門家と伝統音楽家（国楽家）により、自発的に結成されました。きっかけは、薄れゆく韓国伝統音楽を学んでいる子ども達でさえも、理論や知識のみに傾向する状況を危惧した関係者が、放送局プロデューサー等と共に、音楽を心の底から『身につける』年二回の合宿を開催したのが始まりと事務局の朱栄浩さんが話してくれました。

『天のソリ 地のソリ』は、土俗民謡をベースに創作音楽の作成や伝統音楽の公演を行うべく、今日では、中学生からプ

ロを含む成人が休暇等を利用して、技術を磨く一方、日本での公演披露など近年は国際交流を通じての人格形成にも寄与している団体です。

日本との交流と活動状況

事務局の朱さんは、大阪での大学留学を契機に、一〇年近くを日本で過ごしました。その後、『天のソリ 地のソリ』を設立し、二〇〇五年より日韓の文化交流の橋渡しを開始。現在も毎年のように団員を連れ日本で韓国伝統芸能を披露しています。団体の訪問先としては、朱さんが培った人脈を元に、これまでに秋田県たざわこ芸術村や富山県利賀村を訪問しています。訪問先では、日ごろの練習の成果という形で、演奏を披露したり、地元の祭りや、自治体を訪問し異文化理解に寄与しています。私が最も気になった点は、この訪問時の費用の捻出です。学生といっても、二〇人程度が一週間なりといった期間を日本で過ごすにはそれなりの費用が必要です。しかし、この団体では、渡航費用の一部を参加者の負担とし、残りは、公的機関や支援団体等からの補助金等に対応しているのです。



↑夏の全体合宿の様子



↑韓国国内のイベントでの公演

会費を徴収しないこの団体の財源は活動資金の約三〇%が前述の補助金等、そして、残りの六〇%以上が公演等で得た収入とのことでした。

つまり、この『天のソリ 地のソリ』という団体は、青少年育成の趣旨を守りながら、団体運営のために欠かせない資金面の調達も安定しているということです。私は、公的機関等からの資金援助が三割程度と聞いた時、正直驚きました。

NPOでは、自主財源に乏しく、公的機関等からの補助金等が無ければ事業実施もままならない団体もあり、かつ、行政からの支援では、助成を受けた活動の内容に制限がかかってしまうとも言われます。

しかし、『天のソリ 地のソリ』は、団体として活動したいことを申請し、その結果、助成を受けることができればその事業を行うという発想のもと、日ごろの活動を中心に現在に至っています。

もちろん、活動資金面ではある程度自立しているとはいえ、金銭以外の支援が大きく、この支援があるから、活動ができていくのだと朱さんは付け加えました。

これは、例えば、施設の無料使用や、講師のボランティアが挙げられます。

冒頭で紹介した劇場での演奏会も、定休日を利用して、劇場側が無償で演奏披露の場を提供していたのです。

今後の活動

『天のソリ 地のソリ』は、設立後一〇年にも満たないまだ若い団体です。しかし、メンバーの中には、設立当時中学生であった生徒も、今は大学生となり、着実に団員も成長しています。

また、当時は、教えられる立場であった生徒が、新たに加わった若いメンバーを教える立場に変化しているのです。そして、毎年のように、日本の地方を訪れ、地元の人々に韓国の伝統芸能を紹介することで、自らも国際感覚を持ち合わせた人物へと成長しているのです。

事務局の朱さんの元には、韓国で雪が降ると日本へ訪問した生徒の一人からこんなメールが届いたことがあるそうです。

『今年も雪が降り始めましたね。毎年雪



↑ 富山県での演奏を終えて

を見ると、雪の中で演奏を披露した日本を思い出します』
この話をしてくれた朱さんは、とてもうれしそうに目を細めていました。

朱さんに、『天のソリ 地のソリ』の目標はと聞くと、「何の見返りも、また、目標数値も設定していない」と話します。ただ、あえて何か挙げるのであれば、子ども達という、次世代を担うメンバーが活動を通じて、つまり音楽を通じて人として成長し、さらには近くて、今なお遠い国である日本の地方へ訪問することで、どんなことがあっても揺るがない友好関係を築いてほしいと話していました。そして日本を訪ねた子ども達も、将来再度日本を訪ねてみたいと思ってくれればうれしいと語ってくれました。

そんな『天のソリ 地のソリ』は当記事が掲載される一月に沖縄の南風原を訪問します。韓国済州島の音楽を中心に発表する予定とのことですが、参加するメンバーにとっては、琉球の音楽を体感できるいい機会となるでしょう。

おわりに

今年度、自治体主導の多くの日韓交流イベントは中止となりました。それは、行政という立場上、あるいは、行政の指導監督があったためと理解しています。そのような中でも、着実に交流を通じて異

文化理解を深めた団体もあります。『草の根の交流』を推進するためにわれわれ行政の立場からの支援は何かができるのであろうかと当事務所でも検討しています。

今年定年を迎える私の父はかつて、役場の教育委員会に在籍していました。当時から私の町にもクレアから国際交流員が幹旋され、夏には裏山から切り出した竹を二つに割り、流しそうめんを体験させたそうです。そんな彼女は、帰国する際に『結婚したらパートナーをつれても一度この町を訪ねます』と言ったそうです。私の考える『草の根交流』はまさにこのような形だと考えます。

この、細くて、わずかなつながりが、いつか強く、大きなひろがりを見せ、次世代でも揺るぎない友好関係を育んでいくと私は考えます。



天のソリ 地のソリ共同代表
朱 榮浩 さん

日本への留学後、日韓ワールドカップサッカー開催時には記者としても活躍。現在も、韓国と日本にそれぞれ家を持つ。今回紹介した事業以外にも、日本のそば関係者による韓国のそば産地『平昌』訪問を実現させるなど広い世代での日韓交流をプロデュースしている。